――活動中の食事、交通手段は。
後藤　お弁当を持参し温泉のロビーで。村へはバイクでしたね。
細野　私も、弁当を持参しましたが、泊まりの時は支給してくれました。自宅から避難所の東須磨小学校までは、徒歩・地下鉄・徒歩で、ずい分時間がかかりましたよ。
宮城　私達もお弁当持参でしたね。交通手段は自家用車に分乗。大久保へ車6台で行った時は、途中で何台かが迷子になり大変でした。

「この指とまれ」支援活動

――しあわせの村やカレッジの状況は。
飯井　休校中のカレッジは、救援物資の集配拠点となっており、“がんばろう神戸”などのボランティア団体とともに、たくさんの学生さんが仕分けに参加。教室（国際・生環・福祉）には、2段ベッドが入り、佐川急便などの社員が泊まり込みで作業をおこなっていました。
後藤　しあわせの村は、自衛隊のテント基地と仮設住宅になりましたね。

カレッジ前に並んだ救援物資の輸送車

細野　2月に、クラス代表者会議が開かれ私も参加しました。4月から自主学習が始まり、教室には「被災者や地域のために何かしたい」という思いが溢れていましたね。そうそう、7月に事務局が呼びかけて、「この指とまれDAY」が行われましたが、飯井さんは「覚えていますか？」
飯井　「良く覚えていますよ」。これはボランティアグループの立ち上げを計画したものです。多くの学生有志が集まってくれ「何をするか」「何ができるか」「今必要とされていることは」…など、具体化に向けて話し合いを重ねました。
細野　この時、10グループが誕生、私も「子どもと遊ぼう」を結成しました。同時に、「ボランティアセンターを設置しては？」との提案があり、8月に3人（岡　雄・多井温子・細野恵久）で立ち上げました。これが、今のボラセンとして引き継がれています。

無料開放された温泉センターは長蛇の列

――　避難所や仮設住宅の状況は。
宮城　避難所へお見舞いにいくと、大勢の人がダンボールを囲いにして、その中で過ごしている姿が今でも目に焼き付いています。プライバシーがなく本当にお気の毒でした。
後藤　私の自宅近くは、公園や空き地を利用して仮設住宅が数多く建ちました。
細野　村には、2,000戸余りの仮設住宅が設置され、ボランティアグループにとっては格好の活動の場となりました。便利大工・カーボランティア・花作りなど、それぞれが特技を存分に発揮。これらの活動を通して、カレッジでは「ボランティア元年」という言葉が生まれましたね。

待ちに待った授業再開

――授業が再開した際、クラスはどうでしたか。
飯井　10月15日に、今井学長の講話があり11月から授業再開。震災から実に9か月半が経っていました。再開に対して、1期生と2期生では受けとめ方は違ったように思います。入学後4カ月足らずだった2期生は、退学した方も多かったと記憶しています。
細野　確かにそうでした。あるクラスでは60％までに減ったと聞いています。ただ、残った者は互いに励まし合い、結束を誓っていました。
宮城　震災による転居や退学、音信不通、その後亡くなった人もいて、私のクラスも減少しました。
後藤　私は1期ですので、震災による退学はなかったように思います。でも、長田区の火災で自宅を失ったクラスメートが、「北区に来ると別世界に来たようや」とつぶやくのを聞いた時は、返す言葉がありませんでした。